【僕】「ぐふふ…ここに等身大のマスターアルトリア風のラブドールが…」
僕はしがないサラリーマン。年齢も三十路を大幅に超え、彼女も嫁もいない童貞だ。
そんな僕の楽しみは、二次エロ同人誌を楽しむ事と、エロフィギュアを買う事だ。
そんなわけで、僕は等身大のマスターアルトリアのフィギュアが置いてある店へとやってきた。
マスターアルトリアが何か簡単に説明すると、Fateという作品のメインヒロインである、
アルトリアというキャラが、サーヴァントではなくマスターだったら、
という話から生み出された、セーラー服姿のJKだ。
色々設定はあるし登場しているゲームもあるのだが、詳しい話は各自調べてくれ。
ともあれ僕は、そんなマスターアルトリアの見た目にガチ惚れしてしまい、
そのマスターアルトリアにそっくりなラブドールがあると聞いて、この店にやってきたのだ。
【店員】「ホーッホッホッホ。お兄さんいらっしゃい。良く来てくれました」
どこかで見た事があるような、ずんぐりむっくりした黒づくめのスーツを着た店員が僕を迎える。
心の隙間を埋めるだのと書いてある名刺を渡され、何かそんな作品あったなと思い出しそうになるが、
今はそれより等身大ラブドールのマスターアルトリアたんが優先だ。
【店員】「はい、お求めの品はこちらにございますよ」
そして黒服店員が案内した先には、僕が探し求めた少女が、凛とした姿で立っていた。

【僕】「こ、これがマスターアルトリアたんの等身大ラブドール…！　凄い…！」
【店員】「既存のラブドールをベースに、目と髪の毛を加工し、質感を限りなく人体に近づけたものです。骨格がしっかりしているので自立もさせられます。当然エッチな事も…ホーッホッホッホ！」
これは絶対に欲しい。　でも元々高いラブドールに、骨格強化や外見変更などの様々な加工がされており、3桁万円は下らないだろう。
【僕】「…いつか買いに来るので取り置きお願いできますか？　今はお金が無くて…」
【店員】「お客様、これは非売品でして、販売する事は出来ないのです。　申し訳ない。その代わり、1日1万円でのレンタルをしております。　ホーッホッホッホ！」
購入できないのは残念だけど、実際に買うお金はないわけで、レンタルはありがたい提案だった。そして店員は僕に分厚いレンタル契約書を渡してきたが、僕はアルトリアたんのドールを使って、エッチな事がしたいという気持ちで頭がいっぱいになっており、ロクに契約書を読まないままサインをした。その瞬間、僕の意識は暗転し、その場に倒れ込んでしまった。

【僕】「…うっ…何だ今のは…貧血か…？」
どれくらい気絶していたのか。
意識を取り戻した僕は体を起こした。
なんだか体が軽いし、足元が涼しい。
【店員】「ほーっほっほっほ、それではレンタル契約は成立しましたので、一週間どうぞ存分にお楽しみ下さいませ」
店員はそう言うが、先ほどまで展示されていたドールが無い。
まさかもう自宅に配送してくれたのだろうか？
そういう契約だったっけ？　そもそも住所とか契約書に書いたっけ？
それ以前に、僕の視界に入っている、ムダモの無い綺麗な生足は一体どういう事なんだ？

【店員】「ほら、これをご覧ください、お客様」
何が何だかよくわからない僕の前に、
店員は大きな鏡を持ってきた。
そこに映し出されたのは僕ではなく、
マスターアルトリアだった。
ノーパンで割れ目丸出しのアルトリアは
ドールと違い生身の体で、表情が豊かで、
しかも僕の動きに合わせて動いて…。
【僕】「えええ!? ま、まさかこれ……!?」
【店員】「はい、一週間その体で存分にお楽しみ下さい。ホーッホッホッホ!」
信じられない事だが、僕がマスターアルトリアの体になってしまったようだ。

【店員】「その体についてですが、基本的には普通の人間と変わりはありませんが、特徴として…」
店員の説明によると、身体能力が高く、特に性器周辺の筋力および柔軟性が非常に高い点、
子宮の奥まで性感帯になっており挿入が可能、病気への抵抗力が非常に高い点が特徴らしい。
また、生理もあり妊娠も可能だが、レンタル期間が一週間であり気にする必要はないという事だ。
なお、肝心の僕の本体は、もう自動的に自宅に戻っており、返却期間まで眠り続けるとの事で、
食事や排泄の心配は不要らしい。
【店員】「最後に契約内容の確認を…」
そう言って店員は契約書を読み上げ始めたのだが、
僕はそれよりも、ミニスカートの下のノーパンの割れ目に吹き込んで来る風の感触や、
ノーブラの乳首がセーラー服にこすれる感触が気になって、それどころでは無かった。
早く帰ってオナニーがしてみたい。女の体でのオナニーってどんな感じなんだろう。
鑑を見ながらオナニーしてアルトリアたんの体を堪能したい、そんな事ばかり考えていた。

【店員】「レンタル期間の一週間、どうぞごゆっくりお楽しみを…ホーッホッホッホッ！」

僕は店員に見送られながら、お店の外へと出て行った。

短いスカートから露出している太ももとお尻に当たる風が冷たく、ひらひらと動くスカートが不安で仕方ない。

そもそも、自分以外には自分はどう見えているのだろうか。女装した痛いオッサンに見えてないだろうか。

僕は周囲からの視線という不安も抱えながら、繁華街を歩いた。

【男】「うわ、あのJK、めっちゃ可愛いくね？　それにめっちゃスカート短いし」

【男】「…あの店ってアダルトショップだよな？　なんであんな可愛いJKが出てくるんだ？」

【男】「あれだろ？　使用済みの下着とか売りに来たとか？　それとも男が居て何か玩具を…」

【男】「あんな可愛いJK相手に玩具使える男とか、うらやましすぎるだろマジで…」

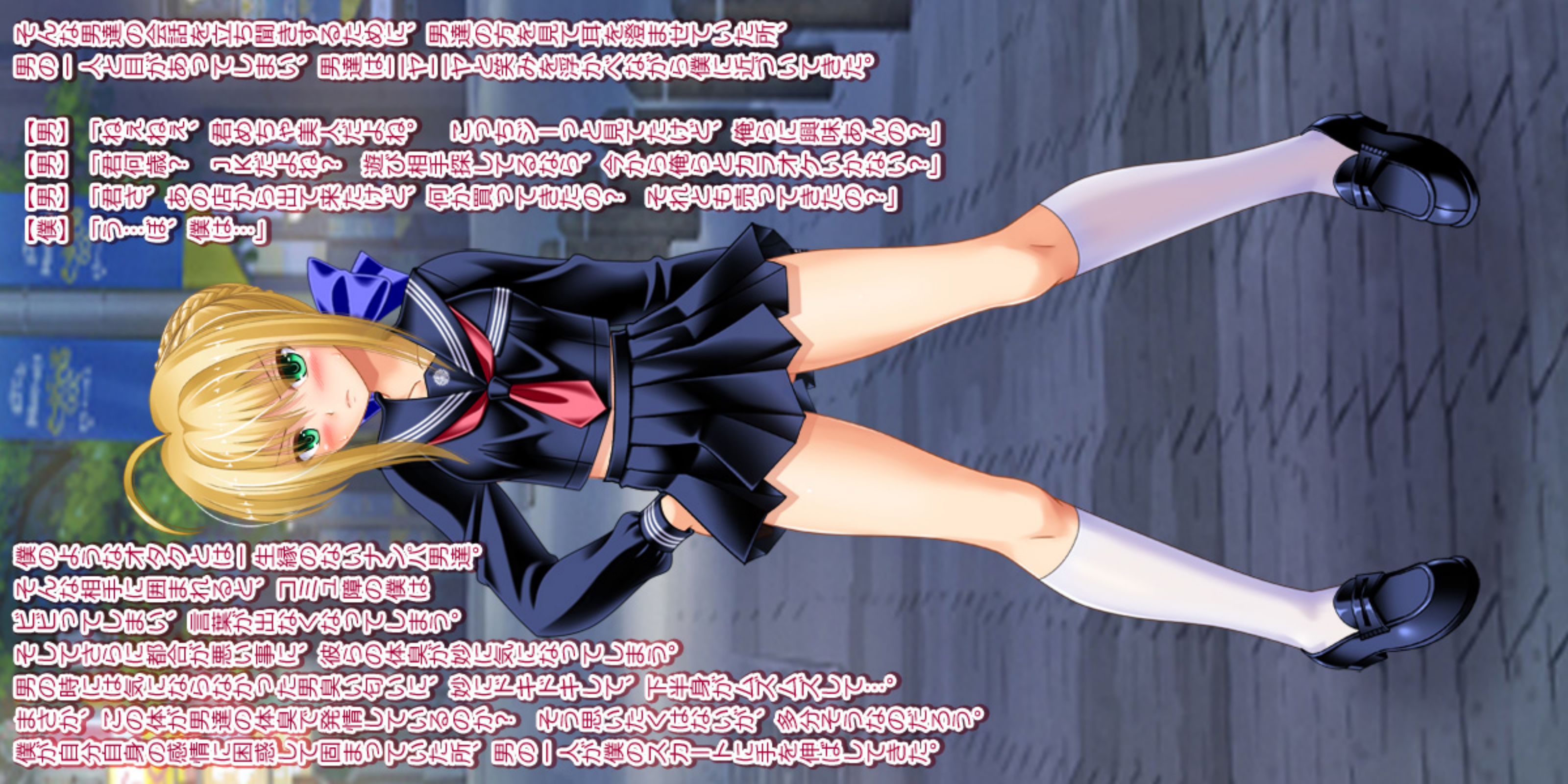
この体は耳も良いようで、繁華街をうろついているガラの悪そうなの声が聞こえてくる。

こっちを見て可愛いJKって言ってるけど、それ今の僕の事だよな？　そうだよな？

どうやら痛いオッサンには見られていない。本当にアルトリアたんの体になっているようだ。

そんな男達の会話を立ち聞きするために、男達の方を見て耳を澄ませていた所、
男の1人と目があってしまい、男達はニヤニヤと笑みを浮かべながら僕に近づいてきた。

【男】「ねえねえ、君めちゃ美人だよね。　こっちをチラチラ見てたけど、俺らに興味あんの？」
【男】「君何歳？　JKだよね？　遊び相手探してるなら、今から俺らと カラオケ行かない？」
【男】「君さ、あの店から出て来たけど、何か買ってきたの？　それも売ってきたの？」
【僕】「こ…ば、僕は…」



僕のような オタクとは1生縁のないナンパ男達。
そんな相手に囲まれると、コミュ障の僕は
ビビってしまい、言葉が出なくなってしまう。
そしてさらに都合が悪い事に、彼らの体臭が妙に気になってしまう。
男の時には気にならなかった男臭い匂いに、妙にムラムラして、下半身がムズムズと…。
まさか、この体が男達の体臭に発情しているのか？　そう思うべきはずが、多分そうなのだろう。
僕が自分自身の感情に困惑して固まっていた所、男の1人が僕のスカートに手を伸ばしてきた。

【男】「おっとごめーん！　手がすべっちゃったー！」
【僕】「えっ…！？　あっ…！」

男は白々しくそう言いながら、僕のスカートを指で引っ張り上げてきた。
当然、スカートに慣れていない僕は、咄嗟にスカートを抑えるという行動を取る事が出来ず、
その場でスカートがひらひらと宙を舞う様子を、ただ茫然と眺める事しか出来ずにいた。

【男】「よし見え…えっ…？」
【男】「ノーパンかよ！　しかもパイパン！」
【男】「やっぱりあの店でパンツ売ってきたのかよ！
それにしても、そんな短いスカートでノーパンとか、レイプされても文句言えないよ？」
【男】「むしろそれが目的なんじゃねえの？　そういう事なら俺達でたっぷり可愛がってやるからな？」

そして僕は、男達に両腕を抱えられ、繁華街にある公衆トイレへと連れ込まれてしまった。

【僕】「うぐっ…！　あっ！」
僕は男子トイレの中に突き飛ばされ、
その場で尻もちをついてしまった。
普段なら悪臭でしかない、男子トイレに
漂う男の匂いに、妙に興奮してしまう。
【男】「学生証みっけ。アルトリアちゃんか。
もしかして留学生？　日本語上手いね」
【男】「今1年って事は05歳くらいかな？　いいねぇ」
【男】「折角日本に来たんだから、思い出作って帰ろうなw」
【男】「海外留学でレイプとか一生モノだな、よかったなアルトリアちゃんw」
男達はそう言って、トイレに誰も入れないよう、内側から鍵をかけた。
穂群原学園学生証
氏名　アルトリア・ペンドラゴン
所属　1年A組
4月1日　発行

【男】「何をボーっとしてんだよ、オナニーして濡らしておかないと痛いぞ？」
男はそう言って、僕にオナニーを促す。
僕は興奮と興味本位も手伝って、
言われるがままに割れ目に指を伸ばす。
【僕】「っ……！　ひぁっ！？」
初めて触る女性器は、柔らかくてヌルヌルして、
そして指が触れただけで、快楽で声があふれてしまう。
指で軽くなぞるだけでこんなに気持ちがいいのに、
こいつらに犯されたらどうなってしまうのだろうか…。
僕はレイプされる恐怖心より、快楽を期待する気持ちが強まっている事に気が付いた。
そんな気持ちに流されるまま、僕は男達の見ている前で、必死に指を動かしていた。
穂群原学園学生証
氏名　アルトリア・ペンドラゴン
所属　1年A組
4月1日　発行
上記の者は本校の学生である事を証明

【僕】「あひっ！　あっ！　あああっっ！！」
《ぷしゃあああああ…》
そして僕は快楽に耐え切れず、
その場でおしっこを漏らしながら、
軽くイッてしまった。
【男】「おいおい、ガチオナじゃねぇかコイツ。
普通俺達に囲まれてここまでやらねぇだろ」
【男】「おお、イッてる漏らしてる。すげぇなコイツ」
【男】「ブーパンで出歩くレイプ願望JKだからな。いいモン拾ったぜ」
男達の罵倒が気にならないくらい気持ちがいい。
僕はおしっこをまき散らしながら体を震わせた。
穂群原学園学生証
氏名　アルトリア・ペンドラゴン
所属　1年A組
4月1日　発行
上記の者は本校の学生である事を証明

【男】「へへっ…それじゃいよいよレイプ本番だな」
そう言って、男の一人が僕の目の前に、黒光りする巨大なペニスを見せつけた。
他人のペニスなんか興味無いのに、アルトリアの肉体はそれを求めているのか、ペニスから目が離せない。
【男】「おい、こいつガン見だぜガン見w」
【男】「どんだけチンポが欲しいんだよこいつw」
【男】「順番に犯してやるからな？　へへへっwww」
ここまで来たら完璧に理解できる。　僕は、アルトリアは彼らにレイプされたいんだ。
僕は観念して、男の指示に従い、彼らのペニスが挿入しやすいよう体位を変えた。
穂群原学園学生証
氏名　アルトリア・ペンドラゴン
所属　1年A組
4月1日　発行
上記の者は本校の学生である事を証明

僕は個室トイレの便座に両手をつき、
男に向かって尻を突き出す恰好になった。
男は満足そうにペニスを握り、僕の
割れ目に先端をこすりつけてくる。
【男】「綺麗な割れ目が丸見えだぜ？」
【僕】「ひっ！　あっ……！」
ペニスの先端でこすり上げられる快楽は、
自分の指でのオナニーよりも背徳的で、
僕の興奮と期待をより高めてくれる。
そして男は僕の割れ目を指で開き、
濡れた膣にペニスを押し込んだ。

《ブチッ…ブチブチブチッ…!》
【僕】「いたっ…あああぁぁっっ!!」
【男】「おっ…こいつ処女だぜ処女!」
男のペニスが僕の体の処女膜を引き裂き、
膣肉を押し広げ、体の中へと入り込んだ。
痛みはあるものの軽く、処女喪失という
イベントを感じさせるためだけの物で、
すぐに快楽が僕の膣におしよせた。
本来ならおぞましいはずの、見知らぬ
男のペニスが突き刺さってる感触が、
異様なまでに気持ちいい。

【男】「いくらこいつが変態で、これがレイプでも、
処女って事ならちょっと慣らしてやるか。
ほら、ゆっくり動くぜ？」
【僕】「おっ……！？　あああああっ……！」
《ずるうううう…ずぷううううう…》
男はゆっくりと、僕の膣にペニスの形を
覚えさせるように、前後に腰を動かす。
膣肉がカリに巻き込まれ絡みついて、
入れられれば膣肉が体内に押し込まれ、
抜かれれば膣肉が外に引っ張り出される。
そんな感触がとても心地いい。

【男】「へへっ…そろそろ大丈夫だな。
ほら、そろそろ本気で動くぜ？」
【僕】「えっ？　あっ！　あああっ！！」
《ズブッ！　ズチュッ！　ズブッ！》
男は少しずつ腰を動かす速度を上げて行く。
膣肉は男のペニスに絡みつき、押し込まれ、
引っ張り出されを繰り返し、オナホのような
音を立てて、血と愛液を周囲に飛び散らせる。
ペニスのカリが特定の場所にひっかかると、
悲鳴のような声を上げてしまうほどの
気持ちよさが脳天まで突き抜ける。

【男】「ほら、どこが気持ちいいんだ？　ここか？」
【僕】「ひっ！　そこ…！　やめっ！　あっ！」
《グポッ！　グポンッ！　グポッ！》
男は僕の反応を見ながら、突き上げる場所を
変化させ、気持ちのいい所を探ってきた。
そして僕が一番藩王した箇所が、膣の
最深部、子宮口である事を確認し、
そこばかりを重点的に突き上げ始めた。
その時僕の脳裏には、店員が言っていた
子宮が性感帯で挿入が可能という言葉が、
ぐるぐると渦巻いていた。

子宮口は少しずつ開いていき、そしてついに…。
《グッ…ヌプンッ！》
【僕】「うぐっ！？　あああぁぁっっ！！」
【男】「うおっ！　一段深く入ったぞ！？」
【男】「マジかよ？　まさか子宮か？」
男のペニスが子宮口をこじ開け、
子宮内にペニスの先端が完全に
入り込んでしまった感覚が伝わってくる。
女の子の一番大事な所に入り込まれたのに、
異様なまでの気持ちよさだ。

【男】「アルトリアちゃん、どこに入ったか教えてくれよ」
【僕】「ひゃ、ひゃいっ…♥ た、多分これ…
子宮に入っちゃってましゅっ♥」
【男】「マジで子宮かよ、気持ちいいか？」
【僕】「ひゃいっ…♥ すごく気持ち
いいれすっ…ああっ♥」
あまりの快楽で呂律が回らない中、
僕は男達の質問に何とか返答をする。
そしてその回答に男はより興奮し、
僕の子宮を存分に楽しもうと、ペニスで
ぐりぐりと子宮内部をかき回していく。
僕はその度、声にならない声を上げた。

《ズプッ！　グチュッ！　ブチュッ！》
男はひたすら僕の子宮を突き上げる。
そしてその動きがだんだん震えはじめ、
射精が近い事が僕に伝わってきた。
【男】「子宮の中に直接出してやる…！
日本のお土産に見知らぬ男の
ガキでも孕んで行けっ！！」
子宮に出すと言われ、僕の膣は無意識に
締め付けを強くし、男を逃がすまいとする。
そしてその直後、男は欲望を解放した。

《ブビュウウウ！　ビュルルルルッッッ！！！》
【僕】「ひぎっ！　あっ！　あああっ！
ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
男はとんでもない量の精液を、子宮内部に
直接吐き出していった。
まるで精液そのものが快楽の塊のように、
精液がしみ込んだ子宮壁から、
とんでもない快楽が押し寄せ、
絶頂の波が何もかも押し流していく。
僕は無様に泣き叫び悲鳴を上げながら、
男達の前で派手に絶頂を迎えた。

《ビュッ…ビュルッ…　ブビュッ…》
【男】「やっべ、滅茶苦茶搾り取られる…
こいつの子宮、気持ちよすぎ…」
僕の膣はまるで牛の乳しぼりのように、
ペニスを器用に締め付け精液を搾り取る。
そして男の射精が落ち着いてきた頃、
絶頂で真っ白になっていた僕の頭が、
ようやく思考能力を取り戻し始めた。
こんな快楽を知ったら戻れなくなる。
それを何とか理解したが、もう手遅れだ。
僕は最後の一滴まで精液を搾り取った。

《ゴボッ…ドロリ…》
【僕】「うっ…あっ…」
【男】「ふぅ…出した出した…」
【男】「出しすぎだお前、後の事考えろ」
男がペニスを引き抜くと、開いた子宮口は
精液をせき止めて置く事が出来ず、
ごぼりと音を立ててあふれ出してきた。
僕は他人事のように、精液があふれ、
床に白濁した水たまりを作る様子と、
愛液でテラテラと光る男のペニスを、
ボーっと眺め、絶頂の余韻に浸った。

【男】「交代だ交代！　次は俺だ！」
【僕】「えっ！？　あああぁぁっっっ！！！」
《ずぶっ！　ずぶぶっぶっっっ！！！》
しかし僕は絶頂の余韻に浸る間もなく、
次の男が僕の膣にペニスをねじ込んだ。
先ほどの男とは違い、こちらの都合を
一切考えない一方的で乱暴な腰の動きに、
僕は思わず嗚咽を漏らした。
しかし、それでもこの体の膣と子宮は、
きっちりと快楽を感じ取って、
男のペニスをきつく締め付けた。

それからどれくらいの時間がたっただろうか。
男達は順番に僕を犯して中出しし、そして
回復したらまた交代して僕を犯した。
僕は何度も何度も精液を子宮に出されて、
その都度律儀に絶頂してしまっていた。
【男】「流石にもう出ねぇわw」
【男】「めちゃ気持ち良かったなw」
【僕】「うぐっ…あっ…♥」
そして僕の体が自由に動けるように
回復するまでの間、男達は面白半分に
僕を眺めてタバコをふかしていた。

僕はフラつく体を何とか起き上がらせ、トイレの個室から出るが、まだ完全に回復しきっていないようで、足がもつれて転びかけてしまい、その場に膝をついてしまった。
その衝撃で、子宮と膣に残っていた精液がごぼりとあふれ出し、床に精液の水たまりを作ってしまう。

【僕】「うぐっ…はぁっ…はぁっ…」

【男】「さ～て、それじゃ俺ら、そろそろ帰って寝るわ、お疲れ！」
【男】「気持ちよかったぜアルトリアちゃん！　また相手してやっからよ」
【男】「わかってると思うけど、警察とか学校にチクるんじゃねえぞ？」
【男】「もしチクったりしたら、この動画をネットでばらまいてやるからな？」
【僕】「う…わ、わかりましたっ…」

どうやら僕がレイプされている一部始終を撮影していたらしく、その動画のコピーが入っていると思われる小さなメモリーカードを、僕の足元へと放り投げてきた。
そして男達は僕に見向きもせず、談笑しながらトイレから出て行った。

【僕】「…レイプされた…！　あんなチンピラみたいな男達に、僕のアルトリアたんが…！
生でチンポ突っ込まれて、子宮内部で射精されて、その上録画までされた…！」

何もかも終わった後、僕の心に残っていたのは、異様なまでの高揚感だった。

【僕】「…それに、女の体でのセックスが、レイプされる事が、
あんなにも気持ちいいなんて…流石に想像以上だった…」

そして、最初のプレイが女慣れした男達によるレイプだった事は、幸運だった。
僕の判断だけでは、他人にレイプしてもらうという発想は絶対に出て来ないし、
出たとしても、コミュ障の僕がそれを赤の他人にお願いする事はまず不可能だ。
恐らく、地味なオナニーだけで一週間を消費してしまっていたに違いない。
しかし、最初のプレイがこれだけ派手なレイプであれば、もう恐れる物は何もないのだ。
どうせ借り物の体なのだから、一週間の間、やりたい放題やってやろう。

とは言え、お腹も減ったし眠くもあるので、今日はとりあえず帰ろう。
トイレットペーパーで拭いたとは言え、まだ歩くたびに精液が溢れ、太ももを伝い落ちて行く。
繁華街はすでに深夜を回っていたが、まだ多くの人がうろうろして、夜の街を楽しんでいる。
その中の多くは、セーラー服姿の僕に驚いた表情を浮かべた後、すぐに性欲に満ちた目つきにかわり、
僕の表情や太ももをじろじろと眺め、そしてひそひそと噂話をしはじめた。

【通行人】「あの子めちゃくちゃ可愛いな…でもなんで男子トイレから出て来たんだ？」
【通行人】「…さっき、チンピラみたいな奴が4人出て来たけど、まさかあいつらに…」
【通行人】「うわ…あの太ももに垂れてる白いの、精液じゃねえの…？」
【通行人】「マジかよ、あいつらに輪姦されてたって事か…やべ…想像したら勃起してきた…」

通行人たちは僕を見て、誰も正義感から通報しようともせず、僕を助けようともせず、
遠巻きに欲望に満ちた視線を向け、好き勝手な事を話し、妄想を膨らませていた。
しかしそんな状況にも関わらず、僕はゾクゾクとした興奮を覚えていた。